Thoreau の荒野と野生

—西方志向の特質—*

六　川　　信**

野性的な「荒野」を無垢な庭園と見なしそこに機械文明が侵入するとき，「文明」を批判し拒否し「荒野」(西部) を志向するというテーマは，処女大陸アメリカの精神風土に深く根ざしたきわめてアメリカ的なテーマであり，アメリカ文学の中に根強く流れている伝統的なものである(1). H. D. Thoreau (1817–62) もこの伝統の流れの中にある. Gilbert White に始まる Nature Writing を真に文学的形式に織りなし磨き上げたのは，アメリカ文学において Thoreau を始祖とするからである(2).

さて，Thoreau の荒野論を展開するとき，彼の日誌を含めた全作品を検討することが必要であろう. 日誌は彼の思索の所産であるからである. だが，西方志向のテーマが彼の作品の中で最も端的に表われているのは，野性的な自然を明白に説く特異なエッセイ "Walking"(3) と周知の傑作 *Walden* の "Spring" の章であるといえよう. 特に "Walking" には，そのテーマが集約的に表現されているように思われる. 従って，本論では，"Walking" を中心に考察を試みることとする.

"Walking" は，頭初からエッセイとして書かれたのではない. 1850年から翌年にかけての日誌にその原型が見られる. Thoreau はそれをもとに，1851年4月 "The Wild" の演題で Concord の Lyceum で講演し，翌月 Worcester で同じ講演をくり返した. 彼はこの講演を好み，何度も加筆してはくり返した. 長くなった新しい原稿に，1856年，"Walking" の題を与えた. 1862年3月，Thoreau は講演に使った原稿 "The Wild" と "Walking" とを一まとめにして完成し Atlantic Monthly 誌へ送った. その年の6月，"Walking, or the Wild" のタイトルで誌の主要記事として世に出た(4). Thoreau 没後1ヶ月のことである. 翌年出版の *Excursions in Field and Forest* の中に，このエッセイは "Walking" としておさめられた.

成立事情にもより，"Walking" は二部からなっている. Walter Harding は，前半部は歩く喜びについて後半部は「野性(生)」について語られている，と言う(5). 彼はまた，「文明病への万能薬としての荒野 (Wilderness) の必要性」という Thoreau の好きなテーマが，このエッセイの中で十分に展開されているともいう(6). "Walking" を読者の視点で見るとき，Harding の言うことは正しい. Thoreau は荒野を愛し，荒野に体ごと出かけていき，野生を求めた. その理由は何か. 彼にとって西部とは何であったか. 我々は作者の視点からこの問題を再考することとする.

---

* 昭和52年10月　日本英文学会中部地方支部第30回大会において発表
** 一般科英語　助教授
原稿受付　昭和53年9月6日

1

Thoreau の時代すなわち19世紀前半世紀は，社会的にはアメリカの西漸運動が盛んであり，国は西へ西へと広がっていた．経済的には産業革命の波が押し寄せ，都市化が著しい社会現象であった時代である．アメリカの繁栄と希望のぬくもりがゆき亘っていた時代であった．

George Washington の大統領就任の翌年1790年の国勢調査によれば，合衆国の総人口約400万のほとんど全部が農村人口であった．都市と呼ばれるにふさわしい人口8千以上の都市は5市にすぎなかった．人口4万2千の Philadelphia，3万3千の New York，1万8千の Boston，1万6千の Charleston，そして1万2千の Baltimore であった(7)．これらの都市人口の合計は合衆国総人口の3％強にすぎなかった(8)．10年後の1800年にいたっても，人口3千以上の都市は16にすぎなかった．

都市が急速に発達したのは1820年頃からである．1820年には人口8千以上の都市は13市となった．1860年には141市に急増し，都市人口も507万2千余に膨張した．この頃には，合衆国総人口中の都市人口の割合は16％強となった(9)．1840年代アメリカ合衆国の人口は36％の上昇を示したが，人口8千以上の都市人口は90％という増加率を示した(10)．これは都市化が西部への移住より急激で強力であったことを物語っている．高賃金の都市の職が都市への人口集中をひき起こしていた．

このように都市が急激に発達した要因は，運河の開通と機械産業の発展と鉄道の発達であった．Erie 運河が1821年に開通し，五大湖地方は New York と水路連絡され，New York は北西部への主要な出入口となった．1832年 Ohio=Erie 運河の開通により，Cleveland は1850年までにフロンティアの寒村から湖の大港町にのし上がった．Chicago 村の建設は1833年で人口わずか350人であったが，運河の開通により何百隻もの船舶が集まり，1860年までには，Cincinnati とほぼ同じ人口10万余の大都市に発展した(11)．50年代には貨物の大部分が運河によって輸送されていたのである．運河が長距離輸送を開始すると鉄道がこれに挑戦しはじめた．

1828年に Massachusetts に鉄道が敷設され鉄道時代の夜明けを告げていた．30年代には鉄道は全国に広がり，1840年には全長3千マイルに延びた．1860年までには，Baltimore, Philadelphia, New York, Boston 間に列車が定期的に運転された．これらの都市は鉄道によって Cleveland, Cincinnati, Chicago, St. Louis などとも結ばれた．南部の主要都市にも鉄道網がはりめぐらされた．1869年には，Nebraska の Omaha から西に向って建設されてきた Union Pacific 鉄道の線路と California の Sacramento から東に延びて来た Central Pacific 鉄道の線路とが，Utah の Promontory で接続された(12)．最初のアメリカ大陸横断鉄道の完成であった．Thoreau が Walden 湖畔の独居生活をしていた頃，交通の中心は鉄道であったのである．

運河と鉄道は，工場に向けてのまた工場からの原料と商品の流通を助けた．蒸気機関による動力と産業技術の革新は生産性を著しく上昇させた．農本主義の経済は産業主義経済へと急激な変化をとげていた．アメリカは，旧世界への原料供給国ではなくなりつつあった．1860年には138万人余が工業関係の工場で働いていたが，その家族も含めると，アメリカ総人

口の約6分の1が製造工業により生計をたてていた．更に，この製造工業に関連する仕事に従事する者をも加えると，全人口の3分の1が製造工業関係によって生活を支えていた，と当時の国勢調査官は報告している(13).

都市と機械産業の勃興，運河と鉄道の建設，都市人口の集中化，賃金労働者の増加．Thoreau の時代は，このように激変と繁栄の産業社会を土台とし，機械文明が急激に押し寄せた時代だった．

目を西に向けると，19世紀中葉はアメリカのフロンティアの西漸運動の最盛期であった．機械技術の進歩に伴い，フロンティアの開発はめざましい勢いで進められていた．元来，フロンティアの彼方の無人の大陸——西部——には抗し難い魅力があった．西部に宿る吸引力が，開拓者や移民を Allegheny 山脈を越え西部へと西進せしめた(14)．牧草地は牧場主を，安価にして肥沃な土壌は農民を，野獣狩りは狩人と交易商人をそれぞれ西部へと誘った．1842年には「オレゴン熱」が開拓民をおそった．西部 Iowa, Missouri, Illinois などの開拓民は，いっせいにパーティーをくんで100台の幌馬車隊をつらねて，オレゴン街道 (Oregon Trail) を通って Oregon へと向った(15).

この西漸運動に拍車をかけたのが Gold Rush であった．1848年1月 California の Sacramento 流域で金が発見されると，このニュースはアメリカ全土に広がり，California への大 Gold Rush を引き起こした．2年のうちに California の人口は10万にふくれ上がった(16)．合衆国各地の冒険家ばかりでなく，一攫千金を夢みた人々は世界のあらゆる地方からこの金鉱地方に殺到した．以前には西部の魅力がアリゲニー山脈をこえさせたが，今度は Gold Rush が人々の心を大平原とロッキー山脈とを跳びこえさせていった．Thoreau はこのような時代にどう生きようとしたのだろうか．

2

Thoreau の葬儀に際し，Emerson が「彼は Concord で一番のひま人であった」と言ったとき，人口2千のその村の人々は，Emerson の真意も汲みとらずに，そのことばに同感したにちがいない．村人の目に映った Thoreau の姿は，ひまそうに山野を歩き廻り，勝手気ままに日雇いの仕事をし，時には父の仕事を手伝って暮らす変人とも言える姿であった．彼は大学卒業直後 Concord で2週間程教職についたが，教育委員会と生徒指導で意見が合わず辞表をつき出してしまった．その後は，父ゆずりの鉛筆製造業の仕事と測量技師としての仕事はしたが生涯にわたって定職をもたなかった．Harvard College 出のエリートの身でありながら，今日のヒッピーのような生活をすることに村人はなじめず，山火事を出したこともあり，Thoreau は村人に白眼視されていた．むしろ，Thoreau の目指した真正の生き方が世間の人々のみならず，Emerson をも含め文人や批評家の理解の範囲をこえていた，という方が適切かもしれない．

Thoreau は都市文明を嫌悪し自然を愛した．西部の荒野を愛し野生を求めた．しかし，Applachian 山系の一部をなすアリゲニー山脈を越え開拓者たちのようにフロンティアの生活をしたことはなかった．この山脈を越え Emerson のように講演旅行に出ることもなかった(17)．晩年1862年の Minnesota への保養旅行が西部への初めにして最後の旅となった．彼は45年の生涯を独身で貫き，主に Concord 周辺の自然を逍遙した．その彼はひたすら西部

への旅を求めた. Thoreau にとって西部とは何であったのだろうか.

The needles of the pine
All to the west incline.[18]

これは, "Walking" の初版ともいえる重要なエッセイ "A Walk to Wachusett"[19] の冒頭の短詩である. Thoreau は1842年7月 Margaret Fuller の兄 Richard Fuller と共に Concord の西方30マイル程のところにある Mt. Wachusett へ徒歩旅行を楽しんだ. このエッセイはその体験から生まれた. 翌年1月, 彼は Boston Miscellany 誌にこれを発表した.

さて, このエッセイの Epigram として用いられているこの短詩は, 初め1841年5月の日誌に書かれていた. 1852年1月の日誌には, pine needles は東に向いていることを観察し確認した事実が記されている. 精緻な自然観察者の態度がうかがわれる. ただ重要なのは, この事実確認後, 彼はこの短詩に手を加え書き改めることを拒否したことである[20]. 科学者より詩人が彼の心の中で優先していたと言えようか. この自然科学者らしくない態度はどこに起因するのだろうか.

"We fancied that there was already a certain western look about this place, a smell of pines and roar of water,……" (W. V. 140) これは, Richard Fullerと共に Concord 西方の Sterling を通り Stillwater 川の岸辺に着いたときの描写である. ここは New England なのだが, 松の香りや川の水の音などその風景の中に, Thoreau は西部の色合いを感じとる. 山頂に着くと, はるか彼方のアラビアか極東にまで旅をして来たかのようだ, と書く. 頂上に張ったテントの中で, 彼は Virgil と Wordsworth を読み新しい喜びにひたる. この頂上は神々の行きかう荘厳で孤独な場所であり Homer の Olympus である, と Thoreau は述べる. Mt. Wachusett はフロンティアとしての西部を連想させる. この山は超絶主義者 Thoreau が融合を望んだ霊と分別との中間世界の象徴となっている[21]. Thoreau の手にかかると, *Walden* が典型的にそうであるように, 現実の旅は彼の深い想像力の中で浄化され変形され[22], アイディアルな世界を描き出すようになる. "In the spaces of thought are the reaches of land and water, where men go and come. The landscape lies far and fair within, and the deepest thinker is the farthest traveled." (W. V. 135) (下線部筆者) この一文こそこのエッセイの根幹である. Thoreau は, 旅を地理的な距離では考えないのだ. "within" の語が彼の内部の世界—精神—を暗示するように, 彼にとって, 旅とは精神の奥深くへ進むことなのだ. 更に, このエッセイのタイトルの "Wachusett" 自体が西部を暗示する. このエッセイは西部への旅の物語であり, "Walking" を生み出す母胎となった.

"Let us migrate interiorly without intermission, and pitch our tent each day nearer the western horizon. The really fertile soils and luxuriant prairies lie on this side the Alleghanies." (Journal, March 21, 1840, W. VII, 131)

「アリゲニー山脈をこえると真のアメリカが始まる」というエマソンの有名なことばがある[23]. 当時の西部は, アリゲニー山脈の彼方に広がっており, アリゲニーを越えた西部 (West as trans-Allegheny) だった. そこは内陸の奥地の西部 (West interior) であり,

"within" の内包 (connotation) をもっている. "interiorly" は「奥地へ」というよりも「精神の内部へ」の意味を帯びている. Thoreau にとって, アリゲニー山脈の向こうの西部へ実際に旅をすることは重要ではなかった. こちら側にこそ, 肥沃な土地と緑豊かな大平原が広がっているのだ. 従兄弟の George Thatcher に宛てて "I am glad if your western experience has made you the more a New Englander."(24) と書き送っている. Thoreau は, 内部世界に沈潜し深く心を耕すことこそ, 遠い西部へ旅することなのだ, と主張する. "The deepest and most original thinker is the farthest traveled."(25) "The brave man stays at home." (Journal, Dec. 2, 1839, W. VII. 106) "……sitting still at home is the heavenly way; the going out is the way of the world." ("A Winter Walk," W. V. 174) そして, 彼は止まり木に立った朝の雄鶏のように高らかに叫ぶ.

If you would travel farther than all travelers, be naturalized in all climes, and cause the Sphinx to dash her head against a stone, even obey the precept of the old philosopher, and Explore thyself. ……Start now on that farthest western way, which does not pause at the Mississippi or the Pacific, nor conduct toward a worn-out China or Japan, but leads on direct a tangent to this sphere, summer and winter, day and night, sun down, moon down, and at last earth down too.(26)

Thoreau の言う西部とは歴史的現実としてのフロンティアとしての西部そのものではない. きわめて象徴性に富んでいる. それは, Concord の西や Mississippi 河や太平洋とかの地理上の西というより, むしろ人間の内部世界の果てしなく遠い西を指している. 西部とは, 開拓者の居住するアリゲニー山脈の彼方の土地ではなく, 一つの概念でありメタファーである(27). 「文明」と「野蛮」との出会う辺境ではなく, 因習的日常生活に訣別して入る新世界の入口であった. それは, 彼自身の内面化された西部であり彼の内部世界でもあった. 例えば, "Start now on that farthest western way" と高らかに歌い上げる Thoreau は, Oregon はおろか Kentucky にも Ohio にも旅したことはなかったのである. それどころか, 物欲にかられ西進する人々を嘲笑した. 彼は Gold Rush を軽蔑の眼で見つめていた. 未開発の経済領域に対する征服欲, 土地への投機的利潤の追求, 反知性主義, 偽善という西部の腐敗した状況は Thoreau に嫌悪感をもよおさずにはおかなかった. Thoreau にとって, Concord は現実の西部よりはるかに西部でありえたし, New England にとどまって真正に生きることは開拓者たちより一層開拓者でありえた. 現実の西部を恐れ嫌悪した彼は, 心の中に築いた西部を崇拝してやまなかった.

Thoreau は Concord に永住することによって, 誰よりも Westerner になろうとした. 従って, Walden Pond は Thoreau にとって遠い西部の湖に等しく, その森は西部の森と映った. Walden Pond は永遠・清浄・黄金時代の象徴であり, そのほとりに立つ小舎も俗世界の文明に汚されず腐敗していない無垢な場所であった. Walden は Concord にある池というよりも, 作者 Thoreau の精神に存在する楽園 (Paradise) と考えていいだろう. この意味では, Walden Pond は時代を超越し現実をこえているものなのである(28). Thoreau が隣人から1マイル離れて住んだことを殊更強調し, "Where I lived was as far off as many a region viewed nightly by astronomers." (*Walden*, 87–88) と誇張する. これ

は，西部へ行かずに西部に住めるという Thoreau の信念によるものだ．先に述べたように，現実の西部へ足を踏み入れたことのない Thoreau は，西部を肌で感じとることはできなかった．彼は，西部に関する40冊に及ぶ旅行記の読書を通して西部への旅を読けていた(29)．Thoreau は J. F. Cooper のように西部の辺境は描かなかったが，西部について熱をこめて語った．

3

Thoreau は西部を象徴的にとらえていた，と述べた．次に，我々は象徴的な西部の中味について考察する．

I believe that there is a subtle magnetism in Nature, which, if we unconsciously yield to it, will direct us aright. It is not indifferent to us which way we walk. There is a right way;…… We would fain take that walk, never yet taken by us through this actual world, which is perfectly symbolical of the path which we love to travel in the interior and ideal world ; …… When I go out of the house for a walk, uncertain as yet whither I will bend my steps, and submit myself to my instinct to decide for me, I find, …… that I finally and inevitably settle southwest, toward some particular wood or meadow or deserted pasture or hill in that direction. ("Walking," W. V. 216–217)

散策の方向を決めるとき，Thoreau は直覚力に任せる．すると自然の不思議な磁気に導かれて常に西方に進む．それが正しい方向なのだ．彼が好んで旅する小路を象徴する道は西にあるからだ．ここに見られる自然の磁気への熱中や，後に述べる神話への関心は，目に見える自然の背後にその自然の根本にある秘奥を探求しょうとしたロマンチスト一般に見られる傾向である(30)．

当時，Concord の散歩地域が村の南西に広がっていた．Thoreau が歩を西に進めるのは，この地理的条件によるよりも西部の象徴性による．彼は西部を「荒野のエデン」と考えた．彼が西部に理想郷を求めたのは，エリザベス女王以来19世紀末まで，ヨーロッパ人やアメリカ人が新大陸を「地上の楽園」として想像力の対象とする傾向のあったのと符号する(31)．複雑なこみ入った文明化された都会的な人々は，清純で原始的な汚されていない処女大陸アメリカを田園的 (pastral) 世界として理想化した．Thoreau も，文明から離れて自然へ，都会から田舎へ向いたい衝動をもった．社会からのがれ理想郷に隠棲するというテーマの下に，"Walking" が書かれた(32)．

Every sunset which I witness inspires me with the desire to go to a West as distant and as fair as that into which the sun goes down.…… He is the Great Western Pioneer whom the nations follow.…… The island of Atlantis, and the islands and gardens of the Hesperides, a sort of terrestrial paradise, appear to have been the Great West of the ancients, enveloped in mystery and poetry. Who has not seen in imagination, when looking into the sunset sky, the gardens of the

Hesperides……? ("Walking," W. V. 219) The west side of every wood and rising ground gleamed like the boundary of Elysium, and the sun on our backs seemed like a gentle herdsman driving us home at evening. So we saunter toward the Holy Land. ("Walking," W. V. 247)

初期アメリカ文学では，日没は旧時代或は死のイメージとして用いられた(33). けれども，Thoreau にとって，真赤な西の太陽は永遠の象徴であり，西へ進めと誘なう偉大な西部開拓者なのだ．日没は彼に「荒野のエデン」を想像させずにはおかない．ここに掲げた引用もきらびやかな「荒野のエデン」のイメージで溢れ，日没の美しい絵画のように我々の心を惹きつける．西部は Thoreau の想像力の中でギリシャの黄金時代と重なる．その時代は社会の進歩が最高潮に達し繁栄と幸福と平和に満ちていた．更に，彼は日没に輝く西の空の中に，美と富に満ち繁栄を誇ったギリシャ人のアトランティス島，ギリシャ神話の黄金のリンゴの楽園へスペリデスの島々や庭園を，投影して見てとるのだ．"Walking" は日没の描写で終わる．すべての森と丘の「西側」はギリシャ神話の極楽 (Elysium) の境界のように輝く．楽園のイメージがこのエッセイをすっぽりと包んでいる．Thoreau は西部を簡素で無垢で純朴な風景美に満ちた牧歌的理想郷すなわち Arcadia と見た．その Arcadia を聖地とも呼んだ．その聖地へ彼は歩くのだ．彼の西部は幻想の土地ではなく想像の精神というにふさわしい．

「光は東方から」は西洋の思想である．ローマ人にとって先進の文明が東方から入って来たように「光」とは文明を表す．Thoreau は東に文明を見たが，西に「実り」を求めた．"From the East light; from the West fruit." ("Walking," W. V. 221) 勿論，この大文字の West は彼の内部世界を指す．西へ進むとは黄金時代を自己の精神の中に実現するに等しい．彼はその方法を Bhagavadgītā をはじめとするインドの聖典に学んだ．この東洋神秘哲学とアメリカにまつわる「インドへの道」という最も古い想念が(34)，Thoreau の西方志向を生む要因となっていると言えよう．彼が，"The pure Walden water is mingled with the sacred water of the Ganges." (*Walden*, 298) と語るとき，明らかに彼の西方志向の中には聖地インドに連なりたいという強い思念があると言える．更に言えば，彼の西方楽園の志向は西方浄土思想に類似している．

4

以上述べたことから Thoreau の場合，西部 =Arcadia= 聖地という図式が成立する．"Walking" は sauntering の語の解説に始まり聖地へ saunter することで終わっている．さて，"saunter" とは "to wander or travel about aimlessly or unprofitably : to travel as a vagrant." (OED), "to walk about idly and in leisurely manner, to travel around aimlessly from place to place (Webster 第三版) の意味だ．或る目的地に到着することではなく，あてもなくひまそうにぶらぶら歩き廻ることなのだ．一方，Thoreau は，フランス語の Sainte-Terre (聖地) が Sainte-Terrer (聖地へ赴く人) =Saunterer となったのだと説く．そして Saunterer とは Holy-Lander (聖地巡礼者) であると断言する．Thoreau は荒野なる西部への歩みを神聖な場所を目指す巡礼者の旅と考えていた，といえる．彼は hiker でも walker でも tramper でも journeyman でもなく Holy-Lander であった(35).

その彼は宣言する. "I have met with but one or two persons in the course of my life who understood the art of Walking, that is, of taking walks, ——who had a genius, so to speak, for sauntering," ("Walking," W. V. 205) 彼の言う，歩く術とはどういうことなのだろうか.

Thoreau は，ほとんど毎日4時間以上，時には何日も続けて歩く．沈思し瞑想しながら，駱駝のように，森を通り丘や野を越え，踏みならされていない道をえらんで逍遙する．10マイル20マイルと間断なく歩み続ける．月光を背にあびて，真夜中から夜の明け方近くまで歩き続けることもある．彼は有名なことばを残している. "I have travelled a good deal in Concord." (*Walden*, 4) 彼の言う sauntering とは，運動のためではない．それ自体が1日の事業であり冒険なのだ．彼は，sauntering は自分の職業である，と主張する．彼は真に生きるための手段として sauntering を実践した. sauntering 実践の覚悟について Thoreau は言う. "If you are ready to leave father and mother, and brother and sister, and wife and child and friends, and never see them again, ——if you have paid your debts, and made your will, and settled all your affairs, and are a free man, then you are ready for a walk," ("Walking," W. V. 206) 彼は，過去を焼き払う儀式の必要を，見事に語っている．これは自然の中に完全に没入するための儀式なのだ．因習と伝統，社会通念とされているものを完全に放棄すること，俗世の私事を整理し身軽になることが sauntering のための第一条件なのだ. Thoreau の言う自由とは，過去をすっぽりと捨て世俗への執着をたつことだ．一回一回の歩みが一種の聖戦 (a sort of crusade) である．だから，二度と帰らぬ覚悟が必要なのだ．なお，中途半端な散策であってはいけない．身体と精神の両面で出かけなければならない. "I am alarmed when it happens that I have walked a mile into the woods bodily, without getting there in spirit." ("Walking," W. V. 211) このように，徹底して内面に向かう心構えが Holy-Lander の第一要件なのだ. Thoreau はその生涯を sauntering にかけた聖地巡礼者であった[36]. ところで，彼の散策は Concord を中心としており，周遊であり回帰的だ．散策に出ても必ず家に戻ってくる．旅に出ても常に Concord に帰る. Thoreau は限りなく Concord に執着する.

5

ヨーロッパ人やアメリカ人が新大陸を Arcadia とみなす傾向は，17世紀以来19世紀まで続いた．新世界を「荒野」(Wilderness) と呼び，これをならわしとしたのはピューリタンたちからであった[37]. 例えば，William Bradford (1590–1657) は *Of Plymouth Plantation* の中で，Mayflower 号で Cape Cod に着いたときの状景を記している. "……they had now no friends to welcome them nor inns to entertain or refresh their weather-beaten bodies;…… Besides, what could they see but a hideous and desolate wilderness, full of wild beasts and men……"[38] アメリカが恐しい荒々しい荒野であるというこのような暗いイメージは，ピューリタンとかれらに続く開拓者たちが抱いたものだった．19世紀に入り，アメリカに繁栄の時代が到来するようになると，このイメージは薄れロマンチックな楽園のイメージへと変わっていく.

"Walking" の中で Thoreau は，アメリカの西部を「荒野のエデン」と描いた．ここに，

西部＝荒野の等式が成り立つ．だが，この「荒野」は，ピューリタンの荒野とは異なり，*A Week* や *Walden* に描かれているように，絵のように美しく優しいおごそかな New England の土壌に生まれた自然である．大峡谷やサボテンの乾燥した砂漠や野牛と蛇とインディアンの恐怖にさらされているフロンティアの荒野ではない．「荒野」とは，処女地であり再生力があり，自由と野生に満ち，常に未踏査で未発見のものを含み，時間を超えたフロンティアの象徴であった(39)．

さて，Thoreau の西部とは野生の象徴でもある．西部は植民者の居住しない野性的土地の象徴である．彼は野生を生存の根源の象徴としてえらんだ(40)．

The West of which I speak is but another name for the Wild; and what I have been preparing to say is, that in Wildness is the preservation of the World. Every tree sends its fibres forth in search of the Wild. The cities import it at any price. Men plow and sail for it. From the forest and wilderness come the tonics and barks which brace mankind. ……The founders of every state which has risen to eminence have drawn their nourishment and vigor from a similar wild source. ("Walking," W. V. 224)

野生をこのように身近に位置ずけて説いたアメリカ人が Thoreau 以前にいただろうか．彼には，若い頃から野生への非凡な憧憬があった．"There is in my nature, methinks, a singular yearning toward wildness." (*A Week*, W. I. 54) 彼は先ず野生の生命力に魅せられた．野生こそが活力と精力の源泉なのだ，と彼は言う．野生は人間を元気ずけ滋養を与えてくれるものなのだ．最も生命力のあるものは最も野性的なものであり，生命と野生とは一致する．Thoreau にとって，西部は人間の中に野性的生命の火花を保持するのに重要な野生の宝庫であった(41)．

Thoreau は，霊的な生活へ導かれる本能と原始的で野蛮な生活へと向かう本能，すなわち，人間の内面の純粋な神性と野性的獣性の二重性に言及する．"I found in myself, and still find, an instinct toward a higher, or, as it is named, spiritual life, as do most men, and another toward a primitive rank and savage one, and I reverence them both." (*Walden*, 210)

ところで，この両面性は本質的に異なるものではない(42)．両者の源泉は同じところにある．無垢，素朴，純粋，清浄等がそれだ．野生は荒々しくはあるが，これらをその属性としてもつ．これらはまた，霊的な生活を送る Holy-Lander の必要不可欠の条件でもある．知識と経験を超越し，直覚的に自然と融合しようとするときの必須の条件なのだ．こうした野生は，霊感と想像力の源泉でもある．"My spirits infallibly rise in proportion to the outward dreariness. Give me the ocean, the desert, or the wilderness." ("Walking," W. V. 228) Thoreau が道を横ぎる woodchuck を見て生で食べたいと誘惑にかられるのは，空腹のせいではない．野生の生命力と素朴で無垢な姿にひかれたからである．彼が荒野の強壮剤の必要をくり返し主張するのは，野生の湧き出すような生命力と共に innocence を見出していたからだといえよう．

Thoreau は神話を好んだ．野生におけると同じ素朴な姿を発見するからだ．彼は言う．

"I do not know of any poetry to quote which adequately expresses this yearning for the Wild. ……Mythology comes nearer to it than anything. ……Mythology is the crop which the Old World bore before its soil was exhausted." ("Walking," W. V. 232) Thoreau は野生を見るとき原始時代へ回帰する．古代人は自己の意志に従って生き，無垢にして清純な生活を送った．道具の道具になり下がった文明人とはちがって，質素であるが心豊かな生活を送った．古代人は自然を敬虔視し，自然を崇拝し，何よりも自然の生命と調和して生きた．Thoreau はそう考え，そういう生き様を自分の生活としたいと願う．

荒野は野生に満ち自由である．Thoreau にとって野生は自由の象徴である．精神の自由を愛した Thoreau が野生を求めたのは，その象徴性のゆえでもある．

Thoreau は *Walden* の "Spring" の章で，野生に満ちる生命の再生の春の季節の歓びを語る．春の到来によって，混沌から宇宙が創造され黄金時代が実現されたと言って，歓びを最大限に表現する．死んでいた Walden Pond が生きかえったと述べ，世界の再創造の時を賛美する．彼が春を愛し，*Walden* が春に始まり春に終わる円環の物語となっているのも，一つには彼の野生への憧憬の結果なのである．

さて，Thoreau の荒野に対する態度は彼の文明観とも関係する．彼は文明を東部から侵入してくると見たことは先に述べた．その東部の都市を覆う機械物質文明の当時の急速な進展状況については，本論のはじめに概説した．Thoreau は東部の文明との対比において西部の荒野を描いた．彼は文明をどう考えたのだろうか．*Walden* の "Economy" の章に彼の文明批判が顕著に述べられているが，ここでは "Walking" を中心に検討を試みる．

Hawthorne, Whitman, Henry James, Hemingway 等代表的なアメリカ作家の主要な作品の中で，機械は風景に突然出現し安全で平和な状態を乱すものとして描かれている．Thoreau も Hawthorne などと同じく，機械文明の象徴として鉄道と蒸気機関車を描く．彼は鉄道を必ずしも否定してはいない．だが，蒸気機関車を "that devilish Iron Horse" (*Walden*, 192) と呼び，"We do not ride on the railroad; it rides upon us. Did you ever think what those sleepers are that underlie the railroad?" (*Walden*, 92) と，枕木を文明の弊害に気付かぬ一般大衆にたとえ，機械文明社会が生み出す害毒に警鐘をならす．鉄道が侵入し，都市化が進み，産業経済社会へと激変する社会の実相をまのあたりに見た Thoreau は，その変化を改良とか向上とかとは考えなかった．因習と伝統の支配する東方，そして，物質文明の横行する東部を，Thoreau は，死んだような無気力な俗悪化したところと考えた．こういう Thoreau の目から見れば，"The mass of men lead lives of quiet desperation." (*Walden*, 8) であった．更に，都市住民を "He has no time to be anything but a machine." (*Walden*, 6) と酷評し，"The civilized man is a more experienced and wiser savage." (*Walden*, 40) と文明人を皮肉っている．東部は歴史を知り芸術や文学を研究するためにいく場所でしかない．

Eastward I go only by force; but westward I go free. Thither on business leads me. It is hard for me to believe that I shall find fair landscape or sufficient wildness and freedom behind the eastern horizon. I am not excited by the prospect of a walk thither; but I believe that the forest which I see in the western horizon stretches

uninterruptedly toward the setting sun, and there are no towns nor cities in it of enough consequence to disturb me. Let me live where I will, on this side is the city, on that the wilderness, and ever I am leaving the city more and more, and withdrawing into the wilderness. ……I must walk Oregon, and not toward Europe. And that way the nation is moving, and I may say that mankind progress from east to west. ("Walking," W. V. 217–8)

Thoreau は文明西漸説を主張する．しかし，それは人文地理学的見地からして必ずしも進歩の普遍的法則とはならない．サラセン帝国において中国文明がヨーロッパに伝播し，New England に移植されたイギリス文明がアメリカ大陸で西方へ広がったことは歴史的事実だが，事情は時代と国によって異なっている．この一節で Thoreau は自らの西方志向を明晰に語っている．彼は都市と田舎という地理的対比で語る．しかし，彼の真意は東部と西部の比較関係にこそある．誇張された語 Oregon は西部を鮮明に読者の脳裡に刻みつける．その西部は即荒野であることは，前に述べた．彼は，旧世界への郷愁と文明の害悪の充満する東部へは，強いられなければいかない．Thoreau は都市から離れ，自ら西へ進み荒野へと引っ込んでいく．野生に満ちた西部は自由と孤独を提供し，そこには未来と希望の広がる無垢な地上の楽園があるからだ．彼は，文明の進歩と西部への侵入が無垢な野生的自然の力を抹殺していくことに警告を発している．"……in Wildness the preservation of the World." ("Walking," W. V. 224) ということばは，野生の中に福音をききとった彼の切実な叫びなのである．

Thoreau は，Concord 附近に野生が十分発見できないとき，荒野を求めて Maine の森へ3度 Cod 岬へ4度更に北はカナダへ足をのばした．その旅の体験は，"A Yankee in Canada" (1853年 *Putnam's Magagine* に連載)，*The Maine Woods* (1864)，*Cape Cod* (1865) の作品となって結実した．これらの作品に描かれる荒野は，*Walden* や "Walking" のそれとは趣きを異にする．例を *The Maine Woods* からとる．

Maine の森に Thoreau がはじめて出かけたのは1846年であった．本当の太古のアメリカを見ようとの期待があった．Concord 周辺の自然に馴れ親しんだ Thoreau は期待に反した荒々しい荒野を見て愕然とする．例えば，クタードゥン山 (Mt. Ktaadn) 山頂の風景は衝撃的であった．Concord の風景とはあまりにも異質であり対照的であったからである．

Vast Titanic, inhuman Nature has got him at disadvantage, caught him alone, and pilfers him of some of his divine faculty. She does not smile on him as in the plains. She seems to say sternly, Why came ye here before your time. This ground is not prepared for you. (W. III. 71) Nature was here something savage and awful, though beautiful. I looked with awe at the ground I trod on, ……Here was no man's garden. ……It was not lawn, nor pasture, nor mead, nor woodland, nor lea, nor arable, nor waste land. ……Man was not to be associated with it. It was Matter, vast, terrific, ——not his Mother Earth that we have heard of. (W. III. 77–78)

荒涼たる冷厳な自然を目前にするとき，母なる自然のイメージは薄れ自然の事物の象徴的

意味に対する彼の超絶主義的自信もたじろぐのであった(43). 恐ろしく巨大な自然があまりにもリアルにそこにあったからである. 冷酷で恐怖に満ち荒々しい自然を Thoreau は確かに知った. では, 彼の「荒野のエデン」としてとらへた西部への志向とどうかかわるのであろうか. 事実としてそこにある自然を前に, 彼の Arcadia は消滅してしまったのだろうか. あるいは, 二種の異質の自然観が彼の中に二律背反的に同居しているのであろうか.

Thoreau の Walden 湖畔での2年2ヶ月の独居生活は1845年の7月に始められた. 彼の Maine の森への旅はこの生活中に実行されたものだ. 彼の代表作 *Walden* が出版されたのは1854年であるが, その前年1853年に彼は Maine の森へ第2回目の旅をしている. *Walden* 執筆にあたり, 彼の頭の中には当然 Maine の森や Cod 岬の荒々しく怒りに満ちた荒漠たる自然のイメージもあったはずである. *Walden* の自然はリアルな自然ではない. この作品が超絶主義の代表作と言われるに相応しく, "Walking" のそれと本質的に同じである. では, Thoreau が Maine の森や Cod 岬の自然の中に求めたものは何であったのか. それは彼が荒野の中に求めた無限の活力の姿であった. 生涯にわたり一貫して, 荒野の中に野生的なものを追求したという点において変わりはないのである. 更に言えば, "Walking" の中で Thoreau は奥まったところにある自然林に覆われた沼地を聖なる場所と感じ, 「至聖所」(a sanctum sanctorum) と呼ぶのと同じく, クタードゥン山においても, 畏怖にも似た厳粛な雰囲気の漂うのを感じたのであった. こうした態度から, 荒々しい自然への旅の体験は, "Spring" の章の力強いことばとなって結晶している(44).

Our village life would stagnate if it were not for the unexplored forests and meadows which surround it. We need the tonic of wildness, ……we require that all things be mysterious and unexplorable, that land and sea be infinitely wild, unsurveyed and unfathomed by us because unfathomable. We can never have enough of Nature. We must be refreshed by the sight of inexhaustible vigor, vast and Titanic features, the sea-coast with its wrecks, the wilderness with its living and decaying trees, the thunder cloud, and the rain which lasts three weeks and pruduces freshets. (*Walden*, 317-8)

この「世界の保存」としての野生の価値という Thoreau の晩年の最も大きなテーマの一つがここに如実に現われている. "Walking" の原型が Maine の森や Cod 岬 (1849年が第1回) への旅以前に書かれていること, また, この作品が彼の生前に手を加えた最後の作品であることを考えるとき, このエッセイに表われている Thoreau の西方志向は, 彼の本質を考察する上できわめて重要な作品である. 彼は荒野なる西部へ進み野生を求めた, と述べて来た. 何故荒野を志向し野生を求めたのだろうか. 彼を超絶主義者として時代思潮の流れの中でのみ考えてよいのだろうか.

6

Thoreau は, 詩人, 超絶主義者, 自然科学者, 政治社会批評家, 測量技師などの顔を我々に見せる. しかし, 一つ一つの顔を見ていても, 彼の全体像は浮かんでこない. 彼の本質を, 「真人・至誠の人」と考える意見がある(45). 一見ヒッピーの姿をしていた Thoreau ではあ

るが，真実を求めて生きた至誠の人であったことは，今まで述べてきたところから明らかである．だが，問題は至誠の人 Thoreau が生涯にわたって探求しつづけたものは何かということである．その視点に立つとき，彼の本質的姿が現われてくるように思われる．

Canby は "Thoreau's West was of the spirit."(46) と言った．Christie は "Thoreau's West was of both the Spirit and the body"(47) と述べる．前者は超絶主義者 Thoreau に重点をおき，後者は彼の自然への密着と自然観察者としての自然への姿勢を考察している．本論では，彼の精神的側面に力点をおいて論じた．Holy-Lander としての彼の姿の中にこそ，彼の本質的人間像があると考えたからである．

Thoreau の志向したこと及び実践したことを羅列する．彼は，見えざる Holy Land を生涯をかけ探求し追求し続けた．そして，自らを Holy-Lander と確信していた．彼は，人間を無垢な荒野にとりかこまれた罪のない存在と考えた．人間の善性を信じ，人間は無限に完成されるという信念をもっていた．清貧，素朴，純粋，質素を求め，贅沢や富を精神的豊かさへの積極的妨害物として排斥した．過去を焼き払い，日常生活に訣別し，ひたすら聖地への歩みを続けた．瞑想しながら間断なく逍遙した．それは日課というより聖地探求のための儀式だった．荒野に共感し，生命力ある無垢な野生の姿に惹かれ心身両面で徹底して荒野へ向った．素朴な野生の活力の中に身をおくことによって，常に霊感 (inspiration) と直覚力 (intuition) を鋭敏に保持し感覚的に自然と自己の精神の中へ沈潜しようとした．孤独を求め，独り荒野を逍遙することを愛した．腐巧した太古の樹木のある「至聖所」としての暗い沼地に行くことを好み神話の世界に共感をおぼえた．原始世界の素朴，無垢，清浄，静寂などに惹かれたからである．

禁欲，清貧，孤独，静寂，瞑想，荒野との共感など上述のことはすべて，mystic に入るための第一要件である．Thoreau はこれを実践した．自己執着を脱し直覚的に無我の境地を探求した．森羅万象の中に神が遍在するから，自然と融合することによって人間は神と合一できる，という超絶主義の思想を Concord の哲人(セイジ) Emerson に学んだ．この自然との融合とか神との合一などということはきわめて mystic なことであるはずだ．Thoreau が，この超絶主義思想の実践方法を，東洋の神秘思想を表す聖典の中に学び，mystic の実践家となったとき，観念の世界にのみ止って生きた Emerson は Thoreau の実像を見失ってしまったのではなかろうか．mysticism はことばを超えており，mystic は理解困難であるからだ．Thoreau は，"The fact is I am a mystic, a transcendentalist, and a natural philosopher to boot." (Journal, March 5, 1853, W. 11, 4) と自称し，"I would fain practice the yoga faithfully, ……I am a yogi." ("Familiar Letters," W. VI, 175) と宣言する．Thoreau の本質を mysticism において把握し，mysticism の実践家として彼の素顔をとらえるとき，彼が野生を求め西方を志向してひたすら sauntering して生きた理由が説明できるように思う．彼の mysticism についての考察は別の機会に譲ることにしたい．

〔注〕

(1) 19世紀のすぐれたアメリカ作家たちがこのテーマとかかわっていたことは数多くの研究書が明らかにしている．Henry Nash Smith, *Virgin Land : The American West as Symbol and Myth*

(Cambridge : Harvard University Press, 1950)., R. W. B. Lewis, *The American Adam : Innocence, Tragedy and Tradition in the Nineteenth Century* (Chicago : University of Chicago Press, 1955)., Charles Sanford, *The Quest for Paradise : Europe and the American Moral Imagination* (Chicago : University of Illinois Press, 1961)., Leo Marx, *The Machine in the Garden : Technology and the Pastoral Ideal in America* (New York : Oxford University Press, 1964)., David W. Noble, *The Eternal Adam and the New World Garden : The Central Myth in the American Novel since* 1830 (New York : George Braziller, 1968). 大橋健三郎,「荒野と文明—20世紀アメリカ小説の世界」(研究社, 1965).

(2) *The Selected Works of Thoreau*, Revised by Walter Harding (Boston : Houghton Mifflin, 1975), p. 639.

(3) このエッセイは近年注目を惹いている. John Aldrich Christie, *Thoreau As World Traveler* (New York : Columbia University Press, 1965), pp. 290–291.

(4) *The Selected Works of Thoreau*, p. 640., Walter Harding, *The Days of Henry Thoreau* (New York : Alfred・A・Knopf, 1970), p. 286., p. 469.

(5) *The Days of Henry Thoreau*, p. 286.

(6) *The Selected Works of Thoreau*, p. 640.

(7) Allan Nevins and Henry S. Commager, *The Pocket History of the United States*, 黒田和雄訳「アメリカ史」(原書房, 1962), p. 147.

(8) Charles A. Beard and Mary R. Beard, *The Beard's New Basic History of the United States*, 松本重治他訳「新版アメリカ合衆国史」(岩波書店, 1964), p. 202.

(9) 絓川 羔, "ソローと都市", 刈田元司編「都市と英米文学」(研究社, 1974), p. 291.

(10) Samuel Eliot Morison, *The Oxford History of the American People*, 西川正身翻訳監修「アメリカの歴史—第2巻」(集英社, 1971), p. 116.

(11) 「アメリカの歴史—第2巻」, p. 110.

(12) 広大な Great Salt 湖を迂回するこの線路は, 勾配もきつく, もともと不経済であった. 湖上を渡る長さ19kmの大鉄橋が完成し, 1942年 Promontory を経由する部分は廃止された.

(13) 「新版アメリカ合衆国史」, pp. 200–201.

(14) *Virgin Land : The American West as Symbol and Myth*, p. 3.

(15) 「アメリカの歴史—第2巻」, p. 201.

(16) Richard B. Morris, ed., *Encyclopedia of American History* (New York : Harper & Row, 1954), p. 207.

(17) エマソンは1850年はじめてアリゲニー山脈を越え講演旅行に出た. その後も何度かでかけている.

(18) *The Writings of Henry David Thoreau*, 20 vols., Manuscript Edition (New York : AMS Press, 1968), Vol. V, p. 133. 以下同全集からの引用は ( ) 中にWと巻数とページ数で示す.

(19) Sherman Paul, *The Shores of America : Thoreau's Inward Exploration* (New York : Russell & Russell, 1958), p. 157.

(20) Edwin Fussell, *Frontier : American Literature and the American West* (Princeton : Princeton University Press, 1965), p. 179. 筆者は論を進めるにあたりこの書に負うところが大きい.

(21) *The Shores of America : Thoreau's Inward Exploration*, p. 159.

(22) "外観(アパーレント)が詩人の表現力により, 現実(アイデイアル)になる. この創造をエマソンはメタモーフォシス (変形) と称する" (斎藤 光「エマソン」(研究社, 1957), p. 148.

(23) 前掲書, p. 182.

(24) Walter Harding and Carl Bode, ed., *The Correspondence of Henry David Thoreau* (Westport : Greenwood Press, 1958), p. 495.

(25) Perry Miller, ed., *Consciousness in Concord : The Text of Thoreau's Hitherto "Lost Journal"* (1840–1841) (Boston : Houghton Mifflin, 1958), p. 153.

(26) Henry D. Thoreau, *Walden*, ed. J. Lyndon Shanley (Princeton : Princeton University Press, 1971), p.322. 以下同書からの引用は *Walden* とページ数で示す.

(27) *Frontier : American Literature and the American West*, p. 189.

(28) Philip Van Doren Stern, ed., *The Annotated Walden : Walden ; or, Life in the Woods* (New York : Clarkson N. Potter, 1970), pp. 11–13.

(29) *Thoreau As World Traveler*, p. 113.

(30) 窪 徳忠・佐々木雄司編「生命哲学のすすめ—自然との合一を求める生き方」(有斐閣, 1976), pp. 190–191.

(31) Leo Marx, *The Machine in the Garden*, 榊原胖男・明石紀雄訳「楽園と機械文明」(研究社, 1972), pp. 40–44., *Thoreau As World Traveler*, p. 104.

(32) 「楽園と機械文明」, p. 11., Frederick Garber, *Thoreau's Redemptive Imagination* (New York : New York University Press, 1977), pp. 216–220.

(33) *Frontier : American Literature and the American West*, p. 181.

(34) *Virgin Land : The American West as Symbol and Myth*, p. 19.

(35) Reginald L. Cook, *Passage to Walden* (New York : Russell & Russell, 1966), p. 8.

(36) Thoreau は *Walden* の中でも同じことを語っている. 六川 信, "H. D. Thoreau の自然観—その二重性について", 「長野工業高等専門学校紀要」第6号, 1976. p. 125.

(37) 小原広忠, "「荒野」への讃歌—クーパーとソーロー", 大橋健三郎編「講座アメリカの文化第二巻—フロンティアの意味」(南雲堂, 1969), p. 134.

(38) Sculley Bradley and Richmond Croom Beatty and E. Hudson Long, ed., *The American Tradition in Literature* (New York : Grosset & Dunlap, 1956), p. 19.

(39) *Thoreau As World Traveler*, p. 116.

(40) Charles Calvin Kopp, "The Mysticism of Henry David Thoreau," unpubl. diss. (Ann Arbor, 1963), p. 204.

(41) Roderick Nash, *Wilderness and the American Mind* (New Haven : Yale University Press, 1967), p. 88.

(42) "The Mysticism of Henry David Thoreau," p. 199.

(43) *Wilderness and the American Mind*, p. 91.

(44) Henry David Thoreau, *Walden and Civil Disobedience*, ed., Sherman Paul (Boston : Houghtn Mifflin, 1960), p. 217.

(45) 谷萩弘道, "ソーロウにおける三つの顔", 「ヘンリー・ソーロウ協会会報」第4号, pp. 13–14.

(46) Henry Seidel Canby, *Thoreau* (Boston : Houghton Mifflin, 1939), p. 335.

(47) *Thoreau As World Traveler*, p. 117.

(本論は, 昭和52年10月9日, 富山大学において開かれた日本英文学会中部地方支部 (The Chubu Branch of the English Literary Society of Japan) 第30回大会で発表した拙稿「ソローの荒野と野生—西方志向の特質」に加筆したものである).